

「京都を学ぶセミナー洛西編」第5回（開催報告）

2020年10月20日
京都学・歴彩館
075-723-4835

2018年度から開始した「洛西の文化資源」研究プロジェクトの成果を分かりやすく解説する「京都を学ぶセミナー【洛西編】」第5回を、下記のとおり開催しましたので報告します。

記

- 日 時 2020年10月20日（火）13:30~15:00
- 会 場 京都学・歴彩館大ホール
- 参加者数 240名
- 内 容 講 演 京都先端科学大学教授 鍛治 宏介
「蚕の社の歴史 一祈雨の神から養蚕の神へ」

■ セミナーの様子と当日の参加者の声

第5回セミナーでは、木島神社（蚕の社）の歴史について講演があった。木島神社の研究はほぼ皆無であったが、昨年三井家との関係が詳細に明らかにされるなどの進展をみせている。本講演では依然不明のままであった西陣地域との関連が解明された。

木島神社は『続日本紀』大宝元年（701）条に初見されるが、創建は不明である。古代の木島神社は祈雨の神としてまつられており、水にまつわる祭祀遺構も発見されている。中世になると、性愛の神、学問の神、命を助ける神などの性格を帯びるようになる。江戸時代の地誌類によれば、江戸時代中期に変容が確認できる。三井文庫ほかの所蔵史料によれば、宝暦5年（1755）に神服宗美が家督を継いで以来、蚕養神社が創建されるなど木島神社の景観が大きく変貌し、熱心な対外活動の成果もあってか、参詣客も増加した。明治には全国から参詣客が集まるようになったが、蚕の神とのみ認識されることも多くなっていたことが勸農雑誌『農工商』の記事から明らかになった。

「神社の変遷、周囲とのかかわりがよくわかっておもしろかったです」、「現地に再訪して石造物をしっかりと確認したいと思います」など参加者から好評を博した。

